

2013

別府史談

第二十六号



別府史談会

(表紙写真)

東別府駅

別府市浜脇1丁目4番3号に地上駅「東別府駅」がある。

本駅は、総事業費4,632円70銭の巨費を投じ明治44年11月1日豊州本線「濱脇停車場」として開業した。初代駅長栗田権蔵、助役石井基之。その歴史を繙いてみると、駅舎周辺一帯は、高橋欽哉、佐藤綱五郎、濱崎丑治、平尾謙平、糸永寅蔵氏らの美田であったが、明治43年5月17日鐵道院によって用地坪当り1円80銭で買収した。その後、鐵道院大分建設事務所(橋梁技師、工学博士、那波光雄所長)によって鐵道敷設工事が進められる。

濱脇停車場開業の当日は、駅舎前の広場北側に杉の大アーチが建てられ、ホームは万国旗で飾られた。浜脇温泉街は、昼は旗行列、夜は提灯行列で夜を徹して祝った。

開業当時、列車本数は、大分・行橋間1日5往復、大分・小倉間1日2往復であったが、大正元年10月1日ダイヤ改正により大分・柳ヶ浦1往復、大分・行橋1往復、大分・門司5往復に増発された。

運賃は、別府・大分間片道1等33銭、2等20銭、3等13銭。

因みに、明治33年5月10日開業の豊州電氣鐵道(別大電車)は、別府・大分間片道12銭、往復23銭。

大正元年の乗車43,082人、降車34,524人であったが、大正10年3月15日から5月13日、第14回「九州沖繩八県連合共進会」が大分市で開催された年には乗車282,850人、降車25,637人と記録されている。

駅名については、地元有志、高橋豊之進、高橋英一、家近宗氏らが中心となり「濱脇駅」を「東別府駅」に駅名を変更するよう猛運動を展開、昭和8年8月19日門鐵局に陳情し、その功を奏し昭和9年4月1日「東別府駅」となった。

停車場施設は、ホーム相対式2面2線。駅舎の建築意匠は、木造平屋建瓦葺き屋根と白壁で両サイドに庇を配したオーソドックスな造りである。ホーム側に大きな庇を設けているため一見二重屋根のような外観を呈している。

ディーテイルズに至っては、正面玄関入口の「釣り扉」と「取っ手金具」、改札口の「ラッチ」は木製、右から書かれた「臨時廣告版」、硝子で覆われた電灯の「ホヤ」、高さ約3メートルの天井から釣り下げた「ランプの傘」、建物構造部分に見られるカバーのある止め金具「袋ナット」、配電線の「碍子」、「建物財産標」など往時を偲ぶ正に「時間が止まった駅」なのである。

そのレトロな雰囲気は、平成7年11月3日公開(東宝)の映画「恋窓」のラストシーンにも登場した。

かつては、隆盛を誇った浜脇温泉街の拠点として、又東九州の鐵道の歴史を知る上で重要な鐵道交通建造物である。

尚、写真右手の「停車場建設記念碑」(石工、杉野定夫)は、濱脇駅停車場設置に尽力した松田源治代議士(元拓務大臣、元文部大臣、大分県宇佐郡柳ヶ浦出身)を称えて、明治45年6月に建立されたもので、松田源治以下28名の地元有志の名が刻されている。

さらに、石碑の揮毫は、元衆議院議長で当時文部大臣であった長谷場純孝(鹿児島県日置郡串木野村出身)といわれている。長谷場純孝の雅号「致堂」は西郷隆盛から与えられた。

平成15年2月5日「東別府駅本屋」は、建築当時の様式が残されているものとして「市有形文化財」に指定、加えて平成16年度別府市HOPE特別賞。

[文責：外山 健一]